

「飯館の人は、情に厚くひかえめで、けれどサービス精神旺盛で、仕事が本当にいてねいだよー」。他にもいろいろ言われませんか。避難先の地域の方から言われて、改めて村の人のよさや「らしさ」が分かったりします。

「らしさ」があるのは、長い時間の中で培われてきた力が、人から人へと引き継がれているからではないでしょうか。「自分にできることを、前を向いてやっとう」と心に秘めて、一步また一步と前に進む若い人たちの姿は、きっと、その確かな証^{あかし}なのです。

登場いただいた皆さんの言葉が、若い人にも、大人にも、お年寄りにも、元気のモトとして届きますように。



一歩ずつ前へ

若き飯館人が見つめる未来

つながり合う人の中で育児をし 子どもたちの主体性を育てたい



渡邊 美沙紀さん（比曾）

1歳から7歳まで4人の子育て中

震災時は、比曾の実家で祖父や兄家族と一緒に10人以上で住んでいました。その頃私は、3番目の子どもを妊娠したばかり。一度は避難先で長女の凜を幼稚園に入れましたが、仮設住宅への入居が決まり、川俣町の間借り園舎で再開していた飯樋幼稚園に転園させました。現在子どもは4人に。気心知れた保護者のつながりがある村の小学校・幼稚園、やまゆり保育所に、4人の子どもたちを通わせています。子育てサロンにも参加していたので、仲良くなった親子で、この春転居した自宅に集まったりもしています。

子どもたちには、いい悪いを区別でき、「ありがとう」「ごめんなさい」が言える子になってほしいと思っています。そこは大切にしたい。私の親もそう教えてくれましたね。あとは「こういう子どもに」というのはなくて、勉強も「したければすればいい」と思っています。小学2年生の凜は勉強したいらしく、書店で選ぶ本が問題集だったりしますから、面白いですね。

仲間に出会える「帰る場所」として 「I.B.C」を続けていこうと思う



大内 亮さん（ハ木沢・芦原）

大内測量設計事務所専務取締役・「I.B.C」代表

震災直後は相馬市などで、自衛隊の人が歩く中、被災した人を案じながら仕事をしていましたが、現在は災害復旧以外の仕事も多くなりました。帰村となれば村内の仕事もますます重要になっていくでしょう。一方では村内の仕事が難しい人もいますし、先が見えない中、皆頭を悩ませているのではないのでしょうか。

「I.B.C」はフットサルの社会人チーム。そのメンバーで開いていたフットサル教室の子どもたちが今も練習に来ています。飯館中学校の子と転校した子が「今こんなことやってるよ」と情報交換。1日の終わりに、ちょっと会いに来れる場所なんです。大人も同じ。終わってからも体育館の外で、どうでもいい話で盛り上がり、抱えていることもざっくり話せている。出たい人で大会にも出ていますし、「I.B.C」は出たり戻ったりも自由な「帰る場所」です。支援団体とのつながりもできて、今後はJリーガーを招いてイベントを開くことも考えています。

村での新しい人間関係を仕事 に活かして自分らしい地元貢献を



佐藤 義幸さん（関根・松塚）

あぶくま信用金庫勤務・村軟式野球チーム主将

飯館支店勤務の頃、村では訪問すると必ず「お茶飲んでけ」と言われ、祖父母の名前で「ああ〇〇さんの孫」となり、ずっと話げできました。現在は南相馬市の本店勤務でお客様の所を回る毎日。苦にならないのは日常的に近所と行き来する村の暮らしがあったからかもしれません。地元金融機関として、自分にしかできないことで地元へ貢献していきたいと思っています。

「白石スポーツ少年団」で野球を始め、中学・高校も野球部でした。現在も職場のチームに所属しています。そして村の軟式野球チームでは、震災の年から大会に出場。その時、県外に避難した前主将の代理の気持ちでキャプテンを引き受け、今に至ります。

来年は練習試合も増やして、早めに活動を始められればと思っています。村の代表という気持ちで出ているので、来年こそは1勝し、ベスト8も狙っていききたい。とはいえ、このチームは集まってワイワイできるのが、何と言っても一番うれしいのですけれどね。